

### 深坂の森の井戸端会議

参加者： 西川浩子 山田澄枝  
 城戸富美子 山本芳枝  
 木本文子 枝村郁子  
 末森裕子 和泉昭夫  
 中尾和子 司会：野口周三

司会「今日は、お忙しいところをありますがどうもありがとうございます。特に改まることはありません。井戸端会議のつもりで、女性の方がさくら友会をどのように考えているか、今後どのようにしたいか、自由にお話しいただきたい。また、深坂の森に係りようがしまいが、日本のボランティア、老老介護、経済、医療、年金、環境、軍事外交何でも結構です。」

中尾「それでは軍事外交についてひとこと(笑)。出かけて行くのが楽しみです。みなさんと一緒に料理を作りながら、ちよつとしたコツも教えられたり、楽しいです。」

司会「いつも厨房に籠りきりで抵抗はありませんか？」

多数「ないです。素晴らしいです。」(笑)

枝村「厨房の仕事と言って、一人でするのは大変です。変だけども、みんなですいている



山本「場所的なのがある、交通が不便。」

司会「電動自転車安くなっているが、あれに乗っている人はいませんか？」

枝村「車に乗れなくなったら、あれに乗ろうかと思つていたら、体力が無くなって、倒れたらおこしきさんのじゃなからうかと思つた。」

司会「人に乗せてくれと言うのは嫌ですかね。」

枝村「乗せてもらいたい。」

から、お野菜ちよつと切っただけで、もう完成ですからね(笑)

司会「もつとしたいというところはないんですか。」(笑)

山本「バターを最後に入れたら香がいいからねーとか、知らないことが沢山分かります。」

枝村「井戸端会議でいいんですよ。ここも長いから皆気に話せます。」

西川「グループによっては、すんわり入りにくいところがあるようですが、ここ(桜友の会)はそんなことはないと思う。新しく入ってきた方も、すぐ、溶け込める。この間亡くなられIさんの奥様と娘さんが、来られていたけど、『Iさんが定例会に出席した日は、よくさくら友の会のことを話していたけど、その気持ちがよく分かった。成る程と思つた。』と言つておられた。」

山田「ボランティアでも、ベ

たべたするのでなく気のおけない仲間。主人と共に入っているの、生活の一部になっていく。別々の場所で活動しても、後で話して情報共有することが多い。活動だけでなく二人にとてもいい影響を受けていると思つている。」

中尾「商売しているんですが、仕事辞めたら、どうしようかと思つているという人があるの、退職したら是非入つてねと言つてます。辞めてからでは遅いですよと言つている。」

末森「若い人に入つて貰いたいと思うので、先日学校にいったとき入つてもらおうと言つた。」

司会「実際に活動してみないと楽しさは分からない。体験が多い。一遍来ると続けて来る人も多。ボランティアでない、ゴミを拾うなんてことはできないですよ。」

中尾「退職したら、何かしなければならぬという人は多い。」

山本「場所的なのがある、交通が不便。」

司会「電動自転車安くなっているが、あれに乗っている人はいませんか？」

枝村「車に乗れなくなったら、あれに乗ろうかと思つていたら、体力が無くなって、倒れたらおこしきさんのじゃなからうかと思つた。」

司会「人に乗せてくれと言うのは嫌ですかね。」

枝村「乗せてもらいたい。」

司会「足のない人たちのために、何かで拾うよと言ふことはできると思うけど。さくら友の会の人、全員が、『運転者の保険で補償される以外の賠償請求権は放棄します。』といったものを一筆、書いておいて貰う必要はありますね。」

山田「自分の木を見に行けない人のために、ホームページに写真を載せてあげたいと思つています。」

司会「それも考えたことはありますが、個人情報問題があります。木の成長を見るために一本一本写真を撮つて、記録したいという思いもあります。写真撮るのも大変です。なかなかいい写真が撮れませんが、本人が撮るのならいいですが。」

西川「それに、木が立派ならいいですが、あまり元気がないと淋しい思いをさせるかもしれない。」

司会「見方によっては、ど根性大根みたい、逆境を必死に耐えて生きているというの、情が湧いて可愛いですかね。」

山本「みなさん、ボランティア活動だ、頑張らなきゃなどと、あまり意識していないところがいいんじゃないでしょうかね。」

末森「若い人に入つてもらいたいと思つています。」

木本「家族連れとか、職場の仲間とか。」

司会「末森さん、自分が働いていた時、さくら友の会に入ると思つたか。」

末森「若い人は仕事があるから大変です。定年退職してすぐの人とか。」

司会「若い人って、そういう意味だったのですか！」(笑)

城戸「定年になって、何かしたいと思ひながら何もしてない人は、家でテレビ見て過ごしてしてるんじゃないかね。」

山田「図書館に行つたら、男の人が大勢新聞読んでいますよ。」

木本「そうですね。図書館にさくら新聞置いたらいいですね。」

司会「どうせ新聞読んでいるのなら、さくら新聞を読んでもらいたい。」(笑)

和泉「読んで共感した人、暇のある方、忙しい方など大いに歓迎ですね。」

西川「昔から、『役を頼むなら忙しい人に頼みなさい。』と言ひますね。さくら友の会に入つてくれる方は忙しい方が多いんですよ。だからいいんです、かえつて。」

木本「自分は末森さんに誘われて入つたんですが、続けられる要素の多いボランティアグループだと思ひます。楽しいです。」

西川「お昼の食事がいい。楽しみにしている人も多。」

司会「同じ釜の飯を食うというのが大事。食事を出すことにしたのは良かったですね。」

中尾「ここ5年間位、会員の移動はどうですか。」

西川「あまり移動はないけど、ボランティア募集の市報を見て来たという方もおられます。」

山田「もつといっぱい植える所があればね。」

司会「今日は、ありがとうございます。」

### 星の王子さまが「下関深坂さくら友の会」の名誉会員に

深坂さくら友の会ができた頃、初めての定例作業で天狗巢病にかかった枝の切除作業を行った。その当時、造園業の人達を除くと、天狗巢病という名前を知っている人ささ少なかった。プロの後ろにぞろぞろとついて行って、天狗巢病の枝を見て回つて勉強した。

あれから10年、天狗巢患枝の切除作業は、冬から春先にかけての毎年の定例作業になった。また、年間を通して観察して来たので、罹患枝には花が咲かないこともよく分かった。先日、管理担当区域の桜の木の本太さを一本一本測つて記録していった。子どもに腕を広げさせて胸囲を測つてやつていくように、一本一本が愛おしくなってくる。そしてふとサン・テグチュペリの「星の王子さま」の中にあつた、数々の名言が浮かんで来た。

「あなたが、あなたのバラの花を、と



「君という人間は、君の行為自体の中に宿つている。君の行為こそ君なのだ。もうそれ以外のところには君はない！」

桜のために草を刈り、肥料をやり、天狗巢患枝の切除をし、地図に木の位置を書き込み、幹

でもたいせつに思つてるのはね、そのバラの花のために、ひまつぶししたからだよ。」

「地球は子どもたちからの借り物。」

「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」

「人間たちはもう時間がなくなつて、ほんとうには、なにも知ることができないでいる。なにもかもできあがつた品を、店で買う。でも友だちを売つて店なんてないから人間たちにはもう友だちがない。」

「本当の愛は、もはや何一つ、見返りを望まないとこころに始まるのだ。」



同期生 三輪憲三

悪い男、伊東治機との出会いは、平成20年11月でした。市報に「さくら友の会」のボランティア活動の募集案内が紹介されておりました。

伊東さんも私もこの活動に初めて参加しました。ここから彼との付き合いが始まりました。入会早々から部会の会議に

の太さを測る。手をかけ、眼をかけ、心をかけるほど愛おしくなる。深坂の森が掛け替えのないものになってくる。

設立10年で、会員の平均年齢もほぼ同じくらい高くなった。若い人たちが家族が参加してくれるともっと楽しくなるのだがと思つていたところ、星の王子さまが活動に参加し、深坂の森を未来の子供たちのために美しく守つていてたいて感謝するとの言葉をいただいた。定例日にはどこかで作業を一緒にしている星の王子さまに会えるかもしれない。

世のお母さん方、ここで星の王子さまや、賢いキツネに会つて、お子様がスマホやゲーム中毒から解放され、失つていた大切なものを、ここで再発見してもらおうと嬉しいですね。

**秋の日帰り親睦旅行について**

場所： 錦秋の豊後大野 探訪 公園 7時発

日時： 11月15日(日) 下関北運動公園

見学： 沈墮の滝 轟橋・出會橋 滞迫峡 原尻の滝 普光寺磨崖仏 用作公園(紅葉狩り)

昼食： お弁当 (道の駅「きよかわ」神楽弁当)

募集人数： 先着25名(最少20名)

締切： 10月30日(金)

旅費： 5,000円 (参加者20名で試算)

(バス代 62,000円 高速道路 10,300円 ガイド 5,000円 お弁当代 780円 集合写真代 300円含む)

~~~~~

NPO法人 下関深坂さくら友の会 事務局 西川

メール： misaka.sakura@arrow.ocn.ne.jp

TEL 083-258-0143 FAX 083-258-5910

出席させて頂きました。新人なのでいつも隣に席を取つても良かったです。彼は遠慮することなく発言していました。欠席することもありません。もちろん作業も皆勤です。「気持ちのいい会やで」と話していただきました。

私の本業が忙しくなり、数回作業を休むと私は殺されていきました。「皆に死んだって、言うといたでー」数年経つと妻にまで「奥さん、ようまあこんな男と結婚したな、ひどい奴やでー」彼の7年間の活動、四季折々の作業、やり取りは会員の皆さんご存知の通りです。

癌の告知を受けた病院の帰り、妻と私に報告がありました。「でっかい癌があつてなあー、入院するわ、見舞いに来んでええからなー」と、いつもの会話でした。



紅葉狩にご近所のお子と参加の伊東さん

やでー、好きな飲み物、取つてなー」話をしてる間に「ほんま、さくら友の会の人はいっぱいばかりやでー、あんた違うけどな」と言う元気がありました。帰り際、ドアに手を掛ける。後から「おおきに！ありがとうございます」と、彼から最後の言葉でした。まだまだ一緒に活動したかったのに残念です。 合掌